

労働力均質化時代の性と文化

Ⅲ. 性の思想化と脱肉体化（1）

越 智 和 弘

1. 女性排除の構造と普遍性

20世紀後半期を、過去5世紀におよぶ近代資本主義の歴史のなかで位置づけるとすれば、それは、少なくとも西欧がそれまでけっして果たしえなかったこと、すなわち性差ならびに人種や文化の差異にかかわりなく、人類全体を西欧人男性のルールにもとづく労働力として資本の世界に動員しうる道を、性と女性の解放をとおし切り開いたことにおいて、まさに画期的だったのだといえよう。ふりかえれば西欧の近代資本主義は、女性を性的悦楽の体現者と見立て排除するという、主にキリスト教会内部で守られてきた禁欲の掟を、宗教改革を境に広く世俗界に解き放ち、性への過剰な罪責感を一般大衆の心に植えつけることによって始動しえたのであった。その結果とりわけプロテスタンティズムが浸透した欧州北方地域に誕生したのは、性的悦楽をこのうえなく憎み恐れ、そこから身を遠ざけねばならない強迫観念を糧に勤勉さを生みだす、世界でも類をみない労働の倫理であった。しかし20世紀に入ると、それまで一貫して労働力の源をなしてきたこの女性敵視の構造が、資本主義が内包する宿命、すなわち市場原理の際限なき拡大と決定的に衝突することになる。なぜなら、性を敵視しその体現者とされる女性的他者を排除することで労働への意欲を生みだすという、それまで機能してきた絡繰りに固執するかぎり、真の意味での資本のグローバル化、すなわち女性と非西欧人を含む全人類を、西欧人男性と等価な労働力として動員する道は開けないからである。資本主義がいわばその出発点から本源的に抱えていたこの自己矛盾を克服するために、1960年代後半期に何が起きたのか。それによってわれわれの世界はどう変化したのか。それを考えることが、この章以降の課題となる。

すでに前章第1項においてわれわれは、資本主義の精神がもっとも浸透した文化圏と、20世紀後半期に性と女性の解放運動が勃発した地域がほぼ完璧に重なる事実を、『世界の文化地図』をもとに確認した。資本主義がとりわけ円滑に機能しているとみなされるこのプロテスタント地域圏においては、当然のことながらそのために不可欠な禁欲のスピリット、すなわち性と女性を過剰なまでに敵視する倫理観も、他の文化圏に比べ強く作用していたことが想像される。そしてそのことは、まさにこの地域において、長年にわたり他者化され資本の世界から排除されてきた女性たちが抱く不満のレベルもまた、恒常的に蓄積されていたであろうことをうかがわせる。前章第2項で、フェミニズ

ムの先導役を果たした女性アーティストのパフォーマンスに着目した最大の理由は、それらの作品が、プロテスタント的伝統のなかで長年にわたり自らの性を徹頭徹尾否認されてきた女性たちのこうした憤懣が、容易に言語化しえないものでありながら、1960年代にはもはや耐えがたいものとして意識化されるようになっていた事実を、まさに芸術以外には成しえないかたちで表現していたからであった。

20世紀後半期にはいり、欧州北部と北米アメリカの女性たちを中心にとりわけ強く顕在化する男性と同等に評価されないことへの不満は、考えてみればこれらの地域が、プロテスタント的な性への禁欲がもっとも厳格に意識化され、それによって男性的に定められた市場原理以外にもはや世界が認識しえないまでに資本主義が深く浸透した地域であったことと密接に関連している。今日われわれが一般に〈世界〉として認識する世界は、少なくとも西欧においては近代の幕開け期以降、男性が自分たちの独占物だと宣言した理性とそれが生み出す文字言語によってすべてを名づけ尽くした言語世界のことである。そしてこのような、もはや言語化しえないものが存在しない世界のことを、ジャック・ラカンが「象徴界」と呼んだ。

すべてが男性という主体、すなわちシニフィアンの手で言語化された象徴界が資本主義と女性にどう関係しているのかをとらえるためには、まず前章第1項で紹介した『世界の文化地図』において、資本主義が円滑に機能する条件として、「法的規範」に基づく社会的ルールが成立していることが挙げられていたことを想起こそ必要がある。〈地図〉は、法的規範により資本主義がもっとも円滑に機能しているのが、欧州北部と北米アメリカからなるプロテスタンティズムが浸透した地域に限定されていることを示していた。法的規範が意味する中身は、人びとが「情報の交換と契約による合意の遵守」に何にも優る信頼を寄せていることにおいて特徴づけられる。いうまでもなく、情報の交換と契約の遵守にとり不可欠なのは言語である。さらにいえば、言語が規定しているもの、つまりその名付け親が言語に課した意味を同じ文化圏に属する誰もが共有していることがきわめて重要となる。このようにして成立した象徴界に生きる人びとは、世の中のすべては言語化しようと思ひ込む、いや、もはや言語化しえないものの存在は一切認めないまでに言語による表現に信頼をおいている。そしてこのように言語によりすべてが規定し尽くされた象徴界において、女性とは何かといえば、それはもはや男性言語によってすみずみまで規定されたもの以外には存在しえないのだとラカンは言い切る。

物事の本質から排除されない女性は存在しない。そしてこの本質というのは言語の本質のことなのである。[中略]もし女性が物事の本質から排除されているのだとすれば、それは女性がすべてとは別の場に在るという意味においてだという事実は揺るぎようがない。女性は、男根的機能が女性的悦楽 (*jouissance*) だと規定

するものとの関係において、付属的な女性的悦楽 (*jouissance*) を保有しているのである。¹⁾

ラカンは、女性として思い描かれるもののすべては、本来ある女性ではなく定冠詞つきの女性 (*la femme/the woman*)、すなわち男性という主体により規定＝言語化された存在でしかありえないことを強調する。「この定冠詞は、シニフィアンなのだ」という彼の言葉によっても明言されているように、一般に女性だと認識されるすべては、男性の手で言語化されることではじめて象徴界内での存在を許されたイメージとして規定される。これに対し、本来あるはずの女性は、ラカンに抛れば「すべて (としてある象徴界) とは別の場にいる (*not all/whole*)」ため、男性により構築される言語世界からは永遠に逃れるものとして想定されるのである。²⁾

ただ、ここで意識されねばならないことは、男性によって言語化されたもの以外の女性を存在しないと見る見方を、普遍として、つまり非西欧文化圏にもそのまま適用しようとするとらえてしまうことの危険性である。過去において数多くの考察者が陥ってきた過ちを繰り返さないために、すでに1章第2項で提示して以来、われわれの考察を一貫して基調づけてきた西欧の普遍性を疑う姿勢を、ここでいまいちど呼び覚ます必要がある。じつは、ラカンが象徴界内部にはもはや存在しないのだと決めつける女性にたいする見方の奥にもまた、普遍を盾に世界に規範を提供しながら、じつは普遍とはほど遠いプロテスタント的禁欲を起点に展開してきた、女性を邪悪な性の体现者として排除する、まさに西欧にしか生まれえなかった特殊な性格が垣間見られるのではないだろうか。定冠詞つきで、つまり男性言語によって規定された女性しかもはやこの世には存在しないと断定しつつも、そうした男性によってかたちづくられた言説から逃れる女性の存在を構想するラカンの姿勢は、先の同項でフーコーが浮き彫りにした西欧以外の多くの文化圏に共通する性観念と比べてみるとどうなるだろう。西欧を除く世界の多くの地域においては、性を禁止の対象とみなす伝統はない。しかしそれでも性を隠すべき対象とみなす理由は、プロテスタント的西欧のように性を邪悪視するからではなく、性から得られる悦楽を貴重なものとみなすものの、それをあからさまにしすぎると性がもたらす至福の効果が消失してしまうことを人びとが知恵として受け継いでいるからであった。³⁾ たとえ言語化しえないとしても、いや言語化しえないことをしごく当然と受け入れたうえで、女性もたらす性的悦楽を、いわば水や空気のごとくれっきと存在しているものとして養い育むこうした西欧以外に一般的な性観念からすると、ラカンの抱える悩みは、ある意味で滑稽にさえ映るのではなかろうか。それは、言語化されたもの以外の一切を信用しない社会、すなわちわれわれがすでに見てきた「情報の交換と契約の遵守」という男性言語への信頼を、最大限にまで高めたうえで機能する「法的規範」にもとづく西欧ブ

ロテスタント的社会においてこそ、あるいはそうした文化圏においてのみ有効でありうる性と女性にたいする見方である可能性が高いように思える。

こうしてみると、女性的悦楽を限りなく敵視する男性的言説が隔々にまで浸透した象徴界が、普遍を体現している保証が大きく揺らいでくる。真実はむしろ逆で、じつは西欧近代こそが、禁欲と男性的理性による言語の独占によって女性を徹底して象徴界から排除するという、世界の文化のなかでみてもきわめて稀にみる性格によって特徴づけられてきたと考えるほうが説得力をもつのではなからうか。そう考えることによってこそ、すでにわれわれが2章第2項でみたキャロリー・シュニーマンら女性アーティストが、男性的主体＝シニフィアンにより否認の烙印を押された自らの性器を、欠如ではなく新たな女性的言語を生む可能性の場として挑発的に晒すパフォーマンスをおこなった意味も理解されるし、こうした芸術に先導されるかのごとく、性の解放とフェミニズムが「法的規範」のもっとも浸透した西欧プロテスタント地域においてこそ勃発した必然性も判明し始める。先のラカンの引用にいまいちど戻ってみよう。彼はそこで、男性言語から逃れる悦楽 (*jouissance*) により体現される女性の位置は、「付属的 (*supplementary*)」なものでしかありえず、「相互補完的 (*complementary*)」ではないと強調していた。そしてその理由を「もし私が相互補完的と言ったとしたら、どんな羽目に陥るか考えてもみてほしい。ただちに女性のすべてが〈象徴界〉に再び吸収されてしまう」からだと説明していた。⁴⁾ その関連でみれば、前章第3項で議論したイヴァン・イリイチが「ヴァナキュラー」⁵⁾ な世界として想定したのは、男性的象徴界において「付属的」な位置にしか存在しえない女性ではなく、じつは象徴界が成立する以前にすでに存在していた意味で、男性主体には規定されえない、そしてまさにそうであるがゆえに女性が「相互補完的」な役割を果たしていた社会のことではなかったか。このような男女の性をめぐる相互補完的な関係こそを「ジェンダー」と名づけたうえでイリイチは、こうした関係を工業化や産業化の名のもとに破壊し、ジェンダーを単純で即物的なセックスへと還元してしまったのが近代資本主義だと看破していた。女性の身体に則してそれを言い換えれば、本来豊穡なものとしてあったはずのセクシュアリティを女性から剥奪し、男に奉仕する生殖機能に還元しえない女性のすべてを、邪悪なものとして排除することを意味していたのであろう。さらにラカンが提示した見取り図に再度それを照らし合わせれば、16世紀以降の西欧近代が一貫しておこなってきたことは、男性主体が定める言語からはつねに逃れる女性を相互補完的な世界から放逐し、効率と数値的成果のみしか評価しない男性市場原理に奉仕しうる女性のみを象徴界に留めおくための壮大なプロジェクトであったとみなせる。そしてイリイチが、まさにセクシュアリティがセックスに還元されたことにおいてこそ、西欧近代を他のいかなる時代からも際立たせる「決定的な人類学的特徴」が見いだせると語っていたことを鑑みれば、もはや西欧以外にはどこにも存在しない女

性の性をめぐるきわめて特異な排除の構造こそが、じつはわれわれが長きにわたり〈普遍〉だと思ひ込まされてきたものの真の姿であることには、もはや疑いの余地がないであろう。

2. 女性の性を二つに分裂させた 19 世紀的戦略

われわれは徐々にだが確実に、性の解放からフェミニズムにいたる一連の若者運動が、1960 年代に勃発する枠組みとその必然性を理解するための道を前進している。前章第 5 項においてとりあげた、第二次世界大戦後のベビーブームと経口避妊薬の解禁、さらには性的表現にたいする検閲の廃止という三つの要素にしても、個々にみれば互いの関連は認められないものの、それらが同時期に起きることで、性と女性の解放運動へ向けた舞台装置をととのえるうえで欠かせない役割を果たしたことが理解できた。そしていままさにわれわれの前に明らかになりつつあるのは、20 世紀後半期に思春期を迎えた若者たちが、長きにわたりの性を抑圧してきた権力構造を打破せねばならないと強く願うにいたった原因についてである。それは、西欧近代のなかで性と女性が、前項でみたように、普遍とはほど遠い特異な言説の下におかれてきた事実由来している。

ただ実際には、いかに普遍と掛け離れた特殊性が起源となっていることがつきとめられたとしても、それは、つねに西欧がとりわけ植民地主義以降一貫して実践してきた覇権との時間的競争関係のなかでしか把握しえないことも知る必要があるだろう。なぜなら、いかに起源が特殊であったとしても、ひとたびそのミッション、すなわち資本主義のグローバル化が貫徹されてしまった暁には、地球上の誰もがそれを〈特殊〉だと感じられなくなってしまうからである。いや、すでにわれわれが前章第 3 項と第 6 項でみたように、1960 年代に起きた性解放の必然性が、21 世紀の若い世代にはもはや理解不能になっている現状をみると、今頃になって、象徴界から排除される性と女性の抑圧構造が、じつは宗教改革以降、性的悦楽を邪悪視する教えを日常のなかで厳格に実践することに努めた欧州北部のプロテスタント地域においてとりわけ強く意識化されたものである可能性を、いくら例証してみせたところで、時はすでに遅すぎるのかも知れない。しかし、たとえ資本主義が世界を覆い尽くすプロジェクトがもはや止めがたいものであったとしても、20 世紀後半期に性を解放する意識に駆られた当時の西欧の若者たちが、性を思想としてとらえようとした事実と、それが実際には彼らの意図とは裏腹に、資本主義の覇権にとり重要なギヤシフトとなった可能性を考える段階へといたったわれわれの作業も止めるわけにはいかない。性解放を引き起こした必然性の正しい理解にいたるために、すでにいくつかの複合的な要素をとらえてきたが、ここではさらに、なぜ性、それもとりわけ女性の性を解放せねばならないという意識が当時の若者たちの心に強く芽生えたのかをめぐり、議論の前提となる要素を、時代を少しさかのぼって整理しておく

必要があるだろう。それは、先にラカンを例にみたような、女性独自の性の存在自体を端から否認する言説とならんで、じつは西欧にはそれとはまったく逆に、女性の性欲を制御しがたいエネルギーとして恐れる文化が根強く存在してきたことと関連している。そもそもこのような、女性をめぐる明らかに相反する言説は、いかにして形成され、西欧文化圏の人びとに受け継がれてきたのか。

西欧のなかでよく耳にされる女性の性をめぐる言説をみていると、そこにはたしかに大きな矛盾があることに気づかされる。それは、一方では女性にはそもそも自発的な性欲などないのだと決めつけながら、他方では女性の肉体を性的悦楽の充満した容器とみなす考え方に集約される。女性に性欲がないという認識が、西欧男性に広く浸透したものであることは、女性はなぜポルノ映画に関心を示さないのかと問われたポルノ映画の男性観客が、なぜって「女には性欲などない」のだからそんなことは当たり前だろう、と答えるくんだりをリオタールが典型的な例として挙げていることからもうかがえる。⁶⁾ このような、性欲は男性特有なもので女性には独自の性欲がないという、西欧では歴史的にはほぼ無条件の前提とみなされてきた言説の源泉をたどると、ひとまずフロイトの論文『性理論のための3編』にいきつく。そのなかでフロイトは、「リビード (= 性的欲動) は、規則的かつ法則的に男性的本性を有している」と述べ、女子の性欲は「受動的な私たちを好む」とたしかに記している。⁷⁾ そこからさらに大きく歩を進め、女性は単にその解剖学的な違いから性欲をもたず受動的な存在であるのみならず、言語との関係においても女性が排除される構造に執着したのがラカンであった。彼は、物事を無意識のレベルにいたるまで言語により名づける男性主体をファルス = 男根と規定したうえで、この男性言語に貫かれていない肉体には性などありえないのだと言い切ることで、女性には、性欲にとどまらず自律した性も言語もありようがないのだと結論づけたのである。

ただここでわれわれはまたしても、これがはたして人間を〈普遍的〉にとらえたうえでの真理とみなしうるものなのか、という疑問を抱かざるをえない。すでに目撃した西欧における女性の性言説をめぐる大きな矛盾、すなわち性欲はないのだと一方では決めつけながら、女性の肉体を性の火薬庫であるかのごとく恐れる構造に再び目を戻すと、フロイトが性的欲動をもたず受動的だと規定した女性の先天的な特性と、言語を介さない本来的な女性を否認するラカンの象徴界そのもののなかに、じつは理性による近代的秩序を構築するうえで大きな障害をなす女性的要素を、是が非でも排除せねばならないとする西欧男性の強い意志が見え隠れしてはいないだろうか。その証左は、時代をわずか19世紀にまでさかのぼるだけで、女性を性そのものとみなす言説が西欧には満ちあふれている事実にも見いだせる。セックスやセクシュアリティという語の起源を、歴史的に分析したスティーヴン・ヒースによれば、〈セクシュアリティ〉という語が広くもちいられるようになるのは19世紀に入ってからであり、しかも当時それはほぼかならず医学

的見地からみた〈女性〉と同義に使用されていたとされる。⁸⁾ 加えて、中世の時代までは、sex という英語はもっぱら生物界の雄・雌を示す意味でしかもちいられなかったのにたいし、16世紀の近代の幕開けを契機に、the sex と定冠詞を付すだけで女性を指すようになっていったとしている。

女は〈性〉the sex である。それは美しく、優しく、かけ離れたもので、男の世界とは異なっている。差異の条件をなす女の〈性（セックス）〉によって女は定義され、性の範囲内で女として定められており、ひと言でいえば、女は性（セックス）そのものだということになる。⁹⁾

権威あるオックスフォード大学出版の英語辞典（OED）に依拠した上記の引用をみるかぎり、これほどまで性そのものを体現しているとみなされていた当時の女性観が、たとえそれが先にラカンが看破したように、男性主体＝シニフィアンによる言説以外の何ものでもないのだとしても、並行して存在していた女性には独自の性欲がないとする一般通念とどう結びつくのかは謎のままである。じつは以上のヒースの言葉のなかに、その矛盾を解く鍵が一部顔を覗かせている。それは、女性を「美しく、優しく、かけ離れたもの」と言い表している部分である。これがシニフィアンによる規定であることには、だれも異論はないであろう。男たちにとって問題となるのは、このように性そのものだと認識される女性が、期待どおりの「美しく、優しく、かけ離れた」役を果たさない場合、つまり、男性の命令に従わずまったく別の〈性〉、すなわち独自の性的悦楽を表明してしまったときである。フーコーは、18世紀以降「女性の身体は、隅から隅まで性的欲望の充満した身体として分析され、評価され貶められた」¹⁰⁾と語っていた。この「評価され貶められた」というくだりは注目に値する。これは何を意味していたのだろうか。

西欧の男性は、富国強兵を旨とする近代国家を形成するうえで欠かせない人口増殖に貢献する女性については、それを母としてのみかろうじて認知する言説を女性に押しつけた。しかし、実際にことはそう簡単には運ばなかったことを、ヒースは証言している。女性がこうした言説に期待どおり応えない例が頻発したからである。「この矛盾をどうすべきか？ 非＝存在というイメージを維持しながら、女たちの性的存在を認めるにはどうしたらいいか？」という難題に直面した19世紀の西欧男性は、「それを疾患〔＝無秩序〕として認識すればよい」という答えを見いだすにいたる。¹¹⁾ここにわれわれが目撃するのは、以降西欧の女性を継続的に刻印していくことになる性を二つに分離するプロセスである。それは、繁殖を保証するかたちで社会体に奉仕する女性には〈母〉として一定の評価を与える。だがその一方で、そこから逸脱する、つまり秩序に貢献しないどころか、そ

れを機能不全にまで陥れかねない男にとって予測不可能な性的欲望を露わにする女性にたいしては、それを〈疾患〉すなわちヒステリーと決めつけるかたちで実践されたのである。フーコーは、この西欧近代に独特な二重戦略のことを、「女の身体のヒステリー化」¹²⁾と名づけている。ここに判明するのは、象徴界のなかで語りうる女性のイメージが二つに分裂し規定されたことである。それは女性たちに、ひとつには男性言語の世界から周縁化され脱性化された母を生きるか、あるいは独自の性的欲望を表明した途端に病人と決めつけられるかのどちらかの選択を迫るものであった。こうして19世紀以降の西欧においては、母となるべく定められたブルジョワ階層の〈健全〉な女性には、子を産む機能こそあれ、性欲などは一切存在しないのだという言説が罷り通るようになっていったのである。

女の機能は生殖である。性的に女は男の対象であって、男の秩序と権力の下におかれる。女は性的なものから除外され、特定の性的存在をもつことはできず、性的感情に動かされることもないということにされている。¹³⁾

ここで、非西欧的視点からみると、ほぼ確実に誤解を招きかねない点に注意を喚起しておく必要がある。それは、性的悦楽に奔放な女性に病気のレッテルを貼ることで社会から排除する仕組みが生みだされたことはある程度理解できたとしても、分裂させられたもうひとつの女性像、すなわち子を産み、母として子供を育て、近代国家の核をなす家庭を純潔な場として守る女性については、良妻賢母として一定の評価が与えられてきたものと思ってしまうことである。しかし、実態はまったくそうではなかった。そしてまさにその事実によってもまた、西欧に唯一的な特異性が露呈することを、ジュリア・クリステヴァは教えてくれる。西欧における男性支配の起源をユダヤ・キリスト教の発生時期にさかのぼり考察するなかで彼女は、一神教的男性神の支配する世界においては、子を産む能力までもが男性の生殖能力に百パーセント依存する言説に置き換えられてしまったことを証言している。

一神教は、父権的機能を体現したものである。つまり、母系的親子関係の場合であれば、[中略]母の肉体のなかで胎児がそだち育まれる記憶が、まだ生き生きと残されていたのだが、父の名のもとに継承される父系的親子関係になると、抽象的、象徴的権威のもと、母体が果たす役割については、その一切が否認され、性愛(エロティズム)は、ひたすら生殖というたったひとつの目的へと集約させられてしまったのである。¹⁴⁾

19世紀以降になると、西欧の女性からは、自身から沸き上がる性欲を露わにした途端病人に仕立てあげられる社会的仕組みがうち立てられることで、独自のセクシュアリティが剥奪されたのは勿論のこと、そのうえさらに母として子を産む機能さえもが、評価の対象外におかれてしまった事実がここに判明する。とりわけ宗教改革以降、キリスト教的禁欲をことさら厳格化するなかで発展してきたプロテスタント的西欧においては、子孫を残す生殖機能はことごとく男性的欲動の支配下におかれるという言説が浸透したため、そうしたなかで母となった女性には、男性言語に独占される社会秩序への参画が一切許されないばかりか、妊娠と出産を通じ、性的悦楽を避けがたく体感した恥ずべき罪の証を、生涯にわたって世間に晒しつづける「沈黙する他者」¹⁵⁾として、かろうじて象徴界のなかに留まることが許されたのである。

このような仕組みからなる体制は、女性が、男性の手で規定された言語という、そのみが唯一の真理を体現する立法的な原理からも、生殖行為に社会的価値を与えるつねに父権的な要素からも、等しく引き離されていること、すなわち、知と権力の双方から隔離されることを要求するものである。¹⁶⁾

以上のクリステヴァのことばから判明するのは、19世紀以降の西欧の女性には、女性の身体が二つに分裂させられたことにより、脱性化した母か病人のどちらかを生きる選択肢しか許されてこなかったという、これまた西欧近代にしか目撃されない特異な言説形成である。そしてこうした19世紀的下地のうえに、すでに1章第3項でも確認したように、20世紀後半期にいたると、母か病人かを選択肢しかなかった女性に広く教育への門戸が開かれることになる。その過程をこれまでの知見から整理しなおすと、沈黙する母によってもヒステリーのレッテルを貼ることによっても完全には解決しえなかった女性的悦楽の制御という資本主義社会にとっての最大の難題を、男性の定めた教育を女性にも施すことによって、女性を内面から男性的につくり変え象徴界に取り込んでしまうとする新たな戦略だということになるだろう。この時代に初めて起きた、とりわけ西欧プロテスタント地域において顕著となる女性の高等教育への大量動員は、19世紀的な性の分裂を背負わされてきた母親をもつ娘たちの心に、やがて二つに定められた女性の伝統的イメージのどちらをも生きたくないと思う意識を台頭させることになる。こうしたなかからこそ、1960年代以降シュニーマンらの芸術を先導役に、母性かヒステリーの選択肢しかない閉塞的状况を打破し、女性独自のセクシュアリティを探究しようとする動きが生まれたのである。しかし、男性言説によって塗り固められた象徴界のなかで生きざるをえない意識に目覚めた女性たちが、男性的ではない独自の言語をみいだすことは困難を極めた。それは、この時代以降推進すべき理想目標として語られることになる男

女平等や機会均等の内実が、実際には今日にいたるまで、男性的価値にもとづいて行動することをしごく当然と思い込むよう、女性を幼少時から教育すること以外の何ものでもない実態に如実に表れている。男性的象徴界から真に逃れる女性的言語をみいだすことが、いかに不可能に近い挑戦であるかは、西欧の知的体系を真剣に学び取ろうとした女性であればあるほど深刻に認識されたことを、エクリチュール・フェミニンを代表する一人であるリュース・イリガライは、つぎのように表現している。

女性が、男性の定めた論理のなかでそもそもなにかのものを表現しうるのは、耳を傾けるに値するものをもつのか、という問い掛けさえなされることはない。なぜなら、そうした問いかけを持ちだすこと自体が、男性のもの以外のなにかの論理、男性にとり不愉快な論理が存在する可能性を許すことになるからである。要するにその論理は、支配権に挑戦するものとみなされてしまうのである。¹⁷⁾

20世紀後半期に、自分たちが歴史的におかれてきた位置を理解し、変革への意識に目覚めた西欧の女性たちが抱えた問題は、単に社会的な平等が達成されれば解決しうるものではない。なぜなら、すでにわれわれがみたように、世界として認識される象徴界そのものがすでに隅々にいたるまで男性的に規定されている以上、機会均等や男女共同参画にしても、遠い昔に定められた男性的規範に従わないものは、依然として誰もが許容しえないとみなすからである。しかし、こうした問題の解決への可能性を考えるまえに、われわれはここで時を若干巻き戻さねばならない。なぜなら、われわれの課題は、西欧の女性が独自のセクシュアリティを模索してきた道筋をたどることではないからである。そうではなく、いまいちど確認すると、こうした抑圧からの解放だと1960年代当時の若者が認識した行動そのものが、じつは、資本主義のグローバル化、すなわち女性と非西欧人の男性的スタジアムへの動員に決定的な効果をもったのではないかという仮説のもとに、その実態を検証することこそが、われわれの最大の関心事なのである。その意味でつぎに重要となるのは、うえに示したクリステヴァやイリガライのように意識に目覚めた多くの西欧人女性が、性を深く分析する意識へといたる道、すなわち性と社会の関係を思想の問題としてとらえる意識が、1960年代以降にどのようにしての生まれたのかを探ることである。

3. 性を思想化する意識の台頭

性の解放運動の担い手は、戦後のベビーブーム期に生まれ60年代後半以降に思春期を迎えた若者たちであった。この時代に、セックスへの好奇心が高まる年齢期に当たる若

者人口の占める割合が西欧諸国においてかつてないほど高かったことが、性解放のエネルギーを生むうえで何にも優る要因をなしていた可能性があることについては、前章第5項ですでに確認したとおりである。¹⁸⁾ しかしそこにはまた、性解放の原因を単純に人口と生理学だけに、つまり性交渉の相手を求める思春期の若者層に特有なリビド過負担だけでは帰結しえない、この時代に特有な傾向がみられたことにも目を向けねばならない。それは、60年代半ばにはベビーブーム世代によってその過半数が占められるまでになっていたアメリカをはじめとするプロテスタント的伝統を受け継ぐ国々の大学生たちが、単に自由な性体験を求めただけではなく、性の解放を、社会を改善するために不可欠な知的課題としてとらえていた事実である。

彼らは性的自由がもつ意味について語り合い、それを文章化し、読書を重ねていた。それは理念が重視された時代であり、そこではとりわけセクシュアリティに関する思想が、きわめて大きな問題としてとらえられていた。¹⁹⁾

西欧史上例をみない規模で、性にたいする知的好奇心が20世紀後半期の若者たちに生まれた事実を抜きにしては、西欧近代の特異性を性の観点から浮き彫りにしようといわれわれが進める考察も、そもそも生まれえなかったであろう。こうしてみると、性を起点に人間の文化や社会のありようを解明しようとする学術的行為は、20世紀前半期にフロイトが立ち立てた精神分析を除けば、1960年代に始まったといっても過言ではない。その意味で、20世紀後半期に起きた、性を思想としてとらえる若者たちの動きは、まさに画期的であったのである。

前章第5項で議論した性の解放運動の舞台設定を果たした三要素に加え、社会変革への武器として性を思想化する動きに拍車をかけたいまひとつの要因として、ベビーブーマーが思春期を迎えたのが、西欧諸国が未曾有の経済繁栄を迎えた時期と重なっていた事実をあげる説がある。ハワード・スミードは、この時期のティーンエイジャーが、過去の若者たちのように学業修了後ただちに社会人となって収入を得ることを親から強く要求されなくなった初めての世代であることを指摘している。²⁰⁾ この点については先に紹介したアリンもまた、この時期の若者が「考える余裕」を与えられたモラトリアム世代であったことを指摘している。

60年代後半に思春期を迎えた男女は、未曾有の経済繁栄のなかで育った。その結果かれらは、将来の実利的な心配事をひとまずおいて、青春を謳歌し、自分たちの理想に沿った生き方を実践することが可能になったのである。²¹⁾

経済的な繁栄が若者たちに物事を深く考える時間と心のゆとりを与えたというのは、たしかに一理ある。しかしだからといってそれだけの理由でこの世代が、性を、人間の生き様の根元をなす問題として、西欧史上初めて重要視するにいたったと言い切れるかという、そこにはまだ説得力に欠ける面がある。

ここで、ひとつ重要な疑問がわれわれの前に浮上する。それは、性を思想としてとらえようとする若者たちの動きは、すでにわれわれが1章第2項で確認しえたこと、すなわちこの地球上で西欧にしか存在しないとフーコーが言い切った、あの性を〈科学〉として言説化する伝統とどのような位置関係にあるのか、という点である。確認しておく、「性の科学」(scientia sexualis)についてフーコーは、その建前と本音のあいだに重大な矛盾が隠れていたことを暴きだしていた。その概要は、17世紀以降一貫して強まる自然界を理性と科学合理主義にもとづき解明し尽くそうとする近代的な知への意志にしたがい、性も科学の対象とされたかにみえた。しかし、じつはその実態は、性をめぐって膨大な言説を産出しておきながら、性の真理が現れそうになった途端、それをかならず覆い隠かくしてしまう「頑強な非知への意志」に貫かれたものであった。²²⁾ この一見すると科学的解明の対象であるかにみせながら、他の科学とは明らかに一線を画するものとしてとらえられた、性をめぐる真理を徹底して隠蔽しようとする西欧の近代的伝統は、同じ時期に始動した資本主義が、プロテスタント的禁欲の倫理によってその根幹を支えられていた事実と密接に関係している。性的悦楽にたいする過剰なまでの罪責感を根底に秘める倫理観こそが、じつは西欧を世界の支配文明に押しあげるうえで決定的なエネルギー源となったことを指摘した人物として真っ先に思い浮かぶのはヴェーバーであろうが、フロイトの説もまた注目に値する。論文『文化の中の居心地悪さ』において彼は、「罪責感こそが文化が発展するうえで最も重要な問題」であり、「文化の進歩という成果を手にするには罪責感の増進による幸福感の減退という犠牲を払わねばならない」²³⁾と述べていた。

こうした伝統が19世紀をとおり西欧に生きつづけてきたことを知りえたいま、われわれがつきとめねばならないのは、20世紀後半期に起きた性の解放運動とその思想化が、はたしてフーコーが言い当てた「頑強な非知への頑強な意志」に貫かれた性をめぐる西欧の伝統を歴史上初めて打ち破ることに成功したのかという点。そしてさらにそれは、西欧を支配文化たらしめる条件としてフロイトが掲げた性にたいする「罪責感の増進」と、どのような関係にあるのかについてである。

性の解放運動は、たしかに性を抑圧してきた西欧の伝統的価値観を大きく転換させたかにみえる。しかし考えてみると、それによってこの時期を境に資本主義の展開にブレーキが掛かった徴候はまったくみられない。いや、それどころかまさにこの70年代以降においてこそ、資本主義は一気に巨大化しグローバルな規模で展開するようになるのであ

る。この観点からすると、性を解放する動きが、必ずしもそのまま資本主義の動力源であった禁欲の倫理観を弱めたとはいえないように思える。なぜなら、ヴェーバーが活写したように、プロテスタント的禁欲を起爆剤に、フロイトのいう欲動の断念と快楽への罪責感が社会一般に浸透し、それによって西欧が、フーコーが看破した「罪を犯したのだと自分たちに言いかせつづける奇妙な文明」²⁴⁾として立ち現われた説が有効であるかぎり、この前代未聞の絡繰りを駆使することで世界を陵駕するエネルギーを獲得した近代資本主義の覇権に、70年代以降衰退現象がみられない、いやそれどころか、むしろその正反対の兆候が顕著である以上、性の解放運動が、西欧の伝統的な禁欲のシステムに支障をきたしたとは考えにくいからである。

性の思想化と「頑強な非知への意志」との関係を解き明かすうえで、ひとつ着目しておくべき点がある。それは、60年代の若者たちが、じつは束縛を解かれた性の自由な表現をすべて歓迎したわけではなかった事実である。この問題は、性の思想化がもつ中身を正しく理解するうえで重要なだけでなく、これからわれわれがみることになる、解放されたと思われた性が、じつは70年代以降には、巧妙なかたちで新たな禁欲の世界に閉じ込められていく現象を見抜くうえでも、確認しておく必要がある。

ドイツを例にとると、60年代当時の若者たちが、二種類の性の言説化を対照的かつ厳密な区別のもとにとらえていたことが記録されている。その一方は、動物学者アルフレッド・C・キンゼイらの主導のもと、アメリカ・インディアナ大学の研究チームが1940年代から50年代にかけて発表し社会的反響を呼んだ『キンゼイ・レポート』²⁵⁾に代表される、性を動物行動学的な立場から〈科学的〉に解明していこうとする流れから生まれた啓蒙をとおした性の大衆化である。²⁶⁾ 提出された膨大な調査結果からは、大衆の興味と好奇心をそそる内容が、1950年代以降、メディアを通しアメリカのみならず西欧世界に広く流布されていった。²⁷⁾ キンゼイ・レポートは、ドイツにおいても大衆の性への好奇心をかきたてるうえで大きな影響力をもったとされる。そしてそうした風潮に感化され、ドイツ国内で性の啓蒙に貢献しようとする人物が現われてくる。その代表株としては、ベアーテ・ウーゼとオズヴァルト・コレの名が挙げられよう。二人は、キンゼイ・レポートのいわば無味乾燥な学術的調査内容に、ウーゼは性玩具やポルノの商品化という物質的側面から、そしてコレは自由で結婚にとらわれない性愛観をメディアを通し広く大衆にアピールするという精神的側面から²⁸⁾、それぞれ影響力をもった。

キンゼイや、ウーゼ、コレといった、性生活をめぐる物質や情報の提供をとおし、性の的大衆化に努めた人びとは、60年代後半期に性の解放とその性の思想化を強く望んだ若者たちからは、敵視の対象としかみなされなかった。なぜか。それは当時の若者たちの目には、性道徳の自由化を唱えるこうした啓発行為は、既成権力の固定化に貢献するだけで、「搾取と抑圧のない社会」を実現するうえにおいては、反動的にしか作用しえな

いと映ったからである。学生たちは、1968年に出版されるや大きな反響を呼んだ精神分析医ライムート・ライヒェの著書『性と階級闘争』などに感化され、後期資本主義社会は、たしかにより大きな性的自由を獲得したものの、それは為政者が権力を維持するのに奉仕するかたちでしか貢献してきていない、という見解で一致していた。²⁹⁾そしてその観点から彼らは、性道徳の自由化を唱えることで、商業的に成功したコレやウーゼらが提供したものは、「悪魔的な媚薬のごとき代物であり、それは甘ければ甘いほど、社会的な死へと人びとを導く」³⁰⁾と糾弾したのである。ここから読みとれる徴候は重要である。つまりそこには、性の解放を目指す当時の若者たち自身のなかに、すでに性の自由な解放の中身を厳しく選別し自己規制しようとする、ある種の禁欲的性格が顕著に表れているのである。

こうしたなか、若者たちが抱く性と政治への知的関心に〈正しく〉応えたのが、社会哲学者ヘルムート・マルクーゼであった。1898年生まれのマルクーゼは、学生運動が1968年に頂点を迎える頃にはすでに70歳に達していたものの、セクシュアル・レヴォリューションということばの生みの親でもあるヴィルヘルム・ライヒ³¹⁾とならび、性と政治の解放を目指す若者たちからは、最大の理論的指導者に祭り上げられていく。1970年にニューヨーク・タイムズ紙は、マルクーゼを「現在生きている哲学者のなかでもっとも重要な人物」と評し、彼の講演先では何百人、ときには何千人という若者が、社会変革と性の解放についての考えを聞こうと集まったとされる。³²⁾

このような現象の背景には、当時すでに経済的繁栄のなかにあった若者世代の関心事が、西欧近代文明の単なる存続よりは、むしろその未来への深刻な懐疑へと移っていったことがある。世界は今後ますます物質主義を拡大していくのだろうか。戦争はいつまでたっても終わらないのだろうか。巨大企業による無限の利益欲の循環のなかで、人間は自身を見失い、環境はますます破壊されていくのだろうか。こうした若者たちの不安に満ちた問いかけに、マルクーゼは、歴史的に限定されたものとしてある権力の余分な抑圧を取り払い社会の〈病根〉を取り除けば、エロスは解放をもたらし、人びとを結びつける肯定的な力となりうると提唱することで、若い世代の共感を呼んだのである。

註

- 1) Jacques Lacan (ed. Jaques-Alain Miller), *Encore Le Séminaire XX On Feminine Sexuality The Limits of Love and Knowledge 1972-1973*, New York/London 1975, p.73.
- 2) Ibid.
- 3) 越智和弘、「労働力均質化時代の性と文化 I. 支配文明の基本構造(1)」『言語文化論集』第33巻 第1号、名古屋大学国際言語文化研究科、2011年、37-38頁。

- 4) Lacan, op.cit., p.73.
- 5) Ivan Illich, *Gender*, Berkeley 1982, p.68-69.
- 6) Jean-François Lyotard, One of the Things at Stake in Women's Struggles, in: *The Lyotard Reader*, Oxford/Cambridge 1989, p.113.
- 7) Sigmund Freud, Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie, in: Sigmund Freud, *Studienausgabe Bd. V. Sexualleben*, Frankfurt am Main 2000, p.123.
- 8) Stephen Heath, *The Sexual Fix*, New York 1984, p.7.
- 9) Heath, op.cit., p.8.
- 10) Michel Foucault, *The History of Sexuality: An Introduction Volume I*, New York 1990, p.104.
- 11) Heath, op.cit., p.25.
- 12) Foucault, op.cit., p.104.
- 13) Heath, op.cit., p.25.
- 14) Julia Kristeva, *About Chinese Women*, New York/London 1986, p.20.
- 15) Toril Moi, in: *The Kristeva Reader*, New York 1986, p.138.
- 16) Kristeva, op.cit., p.21.
- 17) Luce Irigaray, *This Sex Which Is Not One*, New York 1985, p.90.
- 18) 越智和弘、「労働力均質化時代の性と文化 II. 性の解放と資本主義の精神（2）」『言語文化論集』第34巻 第2号、名古屋大学国際言語文化研究科、2013年、37-38頁。
- 19) Allyn, David, *Make Love, Not War: The Sexual Revolution: An Unfettered History*, New York 2001, p.196.
- 20) Howard Smead, *Don't Trust Anyone Over Thirty: The First Four Decades of the Baby Boom*, San Jose/New York/Lincoln/Shanghai 2000, p.XX.
- 21) Allyn, op.cit., p.180.
- 22) Foucault, op.cit., p.56.
- 23) Sigmund Freud, Das Unbehagen in der Kultur, in: Sigmund Freud, *Studienausgabe Bd. IX. Fragen der Gesellschaft I Ursprünge der Religion*, Frankfurt am Main 2000, p.260.
- 24) Foucault, op.cit., p.9.
- 25) Alfred C. Kinsey, Wardell B. Pommeroy, Clyde E. Martin, *Sexual Behavior in the Human Male*, Bloomington & Indianapolis, 1948. Alfred C. Kinsey, Wardell B. Pommeroy, Clyde E. Martin, Paul H. Gebhard, *Sexual Behavior in the Human Female*, Bloomington & Indianapolis 1953.
- 26) 『キンゼイ・レポート』の第1巻は、1948年に出版されるや2ヶ月間で、20万部の売り上げがあったと記録されている。Mariam Lau, *Die Neuen Sexfronten: Vom Schicksal einer Revolution*, Berlin 2000, p.37.
- 27) メディアにより広められた内容のなかで、特に一般の好奇心を引いたのは、アメリカの人口の95%近くは、バイセクシュアルな傾向をもっている（すなわち同性愛に陥る可能性がある）、自慰は男性のあいだできわめて広く浸透している、結婚前に自慰を体験した女性が婚姻後に欲求不満に陥ることは統計上証明しえず、むしろ性感が高まる傾向が強い、性的倒錯は一般に思われている以上に広く実践されている、などといった内容であったとされる。 Mariam Lau, op.cit., pp.15-43.
- 28) Lau, op.cit., p.43, pp.50-55.

- 29) Reimut Reiche, *Sexualität und Klassenkampf*, Frankfurt am Main 1971, p.41. Lau, op.cit., p.57.
- 30) Lau, op.cit., p.58.
- 31) Wilhelm Reich, *The Sexual Revolution*, London 1972. Jeffrey Escoffier, *Sexual Revolution*, 2003, pp.578-598.
- 32) Allyn, op.cit., pp.196-197. ドイツでも、マルクーゼが⁸1967年にベルリン自由大学で、欲動の断念も抑圧もない文明をテーマにおこなった講義には、ドイツ全土から若者が集結したことで語り種になっている。Lau, op.cit., p.61